

赤十字 NEWS

August 2013 Vol.879

<http://www.jrc.or.jp>

赤十字150年

8



日本赤十字社

赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

CONTENTS

TOPICS 2

赤十字広報大使 藤原紀香さん
赤十字奉仕団と被災地訪問

赤十字すまいるぱーく
元気全開、スマイル満開!

国際人道法連絡協議会
普及・啓発へ意見交換

TOPICS 3

献血運動推進全国大会
皇太子殿下からお言葉

楽しく学んだ水上安全法
親子DEレスキュー

JRC 指導者代表が研修会
常任理事会開催報告

SPECIAL 4 | 5

AKB48×日本赤十字社
JOIN!
赤十字は、
あなたの力を
待っている。

AREA NEWS 6 | 7

広島・福井・神奈川・大阪・愛媛・長野・
沖縄・宮崎・福岡・岐阜・愛知

スポーツとコラボ

心からの寄付に感謝!

プレゼント

WORLD 8

インド北部
洪水災害で救援活動

ケニア
IFRCとJICAが洪水被害支援

(リニューアル) 教えて! 国際人道法

(新連載) 今月の一枚



<http://www.jrc-akb48.jp/>

YouTube



<http://www.jrc-undougekkan.jp>



公式 Twitter
始めました

「少しでも皆さんのお役に立てればと思い、またやってきました!」。東日本大震災で被災した方々に元気になってもらおうと、宮城県内の仮設住宅で日本赤十字社の徳島、山形、宮城の3県支部が開いた合同復興支援祭(6月29、30日)に、赤十字広報大使の藤原紀香さんが参加。元気いっぱいの阿波おどりと花笠踊り、そして笑顔の輪が大きく広がりました。



みんなに元気を! 仮設住宅に広がる 笑顔の輪

©Ichigo Sugawara

花笠音頭を踊る皆さんの笑顔が梅雨空を吹き飛ばしました(6月30日、宮城県多賀城市)

クローズアップひと



AKB48

高橋みなみさん

あなたも赤十字活動に JOIN!

「赤十字の活動に参加してみようと思う人が増えてくると、うれしいです」。日本赤十字社オフィシャルメッセージ 3年目を迎えた高橋みなみさん。若い世代にボランティア活動や救急法講習などへの参加を呼びかける今年度のキャンペーンについて、期待を寄せます。

キャンペーンのCM撮影では、AED(自動体外式除細動器)を使った心肺蘇生を実際に体験。「AEDの使い方を知っていることで、誰かのいのちを救うことができるんだって、あらためて実感しました。知っている人が

何人いれば協力し合えるし、多くの人を助けることもできる。だからこそ、たくさんの方に赤十字の講習を受けてほしい」

東日本大震災から2カ月後に日本本社を訪れ、被災地での赤十字活動について知りました。「ボランティア活動や救護活動などたくさんのことをしていて、本当に驚きました。メッセージ 3年目、赤十字の素晴らしい活動を多くの人に伝えられるよう、一生懸命頑張っています」

PROFILE

1991年、東京生まれ。愛称「たかみな」。AKB48一期生で、昨年「総監督」に就任。イベントや記者会見では代表であいさつする役割も。グループは東日本大震災直後、「誰かのために」プロジェクトを立ち上げ、義援金募集や被災地訪問活動を展開。今年3月時点で募金額は13億円に達し、被災地での月1回のミニライブも継続中。

赤十字広報特使 藤原紀香さん、8回目の被災地訪問

徳島・山形・宮城の
赤十字ボランティアと交流

東日本大震災の被災地に、一緒に元気を届けよう——日本赤十字社の徳島、山形、宮城の3県支部の赤十字奉仕団員(ボランティア)と職員約60人が6月29日から2日間、宮城県内の二つの仮設住宅で復興支援祭を開催。赤十字広報特使で女優の藤原紀香さんも参加し、各県自慢の郷土料理の炊き出しやゲーム、踊りなどを通して住民の皆さんと交流しました。

徳島、山形の奉仕団は、昨年5月に宮城県内で合同炊き出しを行って以来、4回目の被災地訪問。今回は地元宮城の奉仕団も加わり、3県合同の支援活動となりました。

山形県赤十字奉仕団の我妻(わづま)さんが訪れたのは、県北部の気仙沼市立小原木中学校仮設住宅(51世帯)と、県中央部にある多賀城市の公園野球場仮設住宅(150世帯)。

自慢の郷土料理で
みんなに元気を

3県の奉仕団と藤原さんが訪れたのは、県北部の気仙沼市立小原木中学校仮設住宅(51世帯)と、県中央部にある多賀城市の公園野球場仮設住宅(150世帯)。

由美子委員長は「震災から2年数カ月、これまでのような炊き出しだけではなく、被災者の皆さんとの会話や心の触れ合いを大事にしようと企画しました」。

芋、山形の芋煮とサクランボ、宮城の厚揚げ焼きなどを振る舞ったほか、藤原さんはイチゴやバナナなどをつけて食べるチョコレートフォンデュを提供。

子どもたちからは「どつてもおいしい!」「僕のはプチケーキにつけて」などの歓声が上がりました。

輪投げには車いすに乗った高齢者も参加し、うまく輪が入ると「やったー」と大きな声がかかり、ハイタッチで声援に応える人も。また集会場には、リラクゼーションコーナーも設けられました。

多賀城市内の仮設住宅では駐車場に並べたテントの下で、徳島の阿波牛を使った牛丼や鳴門金時の大学



チョコレートをたっぷりつけて。お味はどうか?



仮設住宅に「阿波おどり」の軽快なおはやしが流れると、踊りの輪はどんどん広がりました

当たらなければ、今日は当たってとでもうれしかった。一緒に会場に遊びに来た祖母の金沢信市さん・美代子さんは「桃花は車ごと津波に流されて、自衛隊の方に助けってもらったんです。震災以来大変だったけど、今日からはいいことがあるかもしれないね」と目を細めました。

阿波おどりと花笠踊りで笑顔に

支援祭のクライマックスは徳島の阿波おどりと、山形の花笠踊りです。藤原さんも鮮やかな浴衣と笠、赤十字マーク入りの法被にそれぞれ着替えて参加。踊り自慢の両県奉仕団のメンバーと一緒に踊り始めると、住民の皆さんも次々と輪の中に加わり、笑顔と笑い声がいつぱいに広がりました。

会場からは「紀香さんパワーがもらえて、とてもうれしかったです」「こんなに楽しんだのは去年の秋祭り以来。みんなの笑顔が見られて、本当にうれしい」などの声が聞かれました。

藤原さんの被災地訪問は、震災1カ月後の2011年4月に宮城県石巻市などを訪ねて以来、8回目です。

「皆さんの笑顔に少しづつ力が戻っているように感じます。ボランティアが少なくなっていると思いますが、これからも被災地のことを全国に伝えていきたい」と被災地訪問活動を継続していく決意を語りました。

今年もスタート

赤十字すまいるぱーく in 福島
元気全開、スマイル満開!

海外救援金を財源にしたすまいるぱーく。昨年度は福島県内の4市6会場で開催され、3万5000人余りの親子が来場しました



フワフワ遊具の中を跳んで走って転がって。「すべりだいがおもしろーい!」「ぼく5回もやったよ!」「わたしは7回!」。ニコニコで会場を遊び回る子どもたちの額に汗が弾けます。日本赤十字社福島県支部は今年度1回目の「赤十字すまいるぱーく」を7月2日から12日まで福島市南体育館で開催。園児や保護者など7500人余りが来場し、元気いっぱい笑顔の笑顔が咲きました。

すまいるぱーくは、放射線の影響で外遊びに対して不安のある子どもたちに、思いきり体を動かして遊ぶ機会を提供しようという日本赤十字社のある子どもたちに、思いきりの復興支援事業です。

会場には、巨大なエア遊具やボールプール、エアトラックなどの遊具がずらり。保護者や幼稚園の先生からは「会場も広く、子どもたちが伸び伸び体を動かせるのがうれしい」「子どもたちの表情も普段より輝いています」と喜びの声

が聞かれました。

今も残る放射線への不安

震災から2年以上が経過しましたが、「まだまだ福島県は立ち直る途中」(福島県支部野崎洋一事務局長)。放射線への不安は残っています。

4歳の息子の理日(りひ)と一緒に来場した川越文代さんは「除染されたとはいっても気になりますね。公園でも遊ばせないようにしています」。運動不足などへの不安から外遊びをさせているという保護者も「土には触らせたくない」と注意しています」と声をそろえました。

それだけに、すまいるぱーくには保護者からの高い期待が寄せられています。今年度は7月の福島市を皮切りに、年末まで福島県内計6市を巡回する予定です。

国際人道法の普及・啓発へ

「IHL国内委員会」再開を視野に
日赤・関係省庁・有識者の
3者で意見交換会

※IHL: International Humanitarian Law

国際人道法(IHL)を幅広い国民各層に普及・啓発していくための「IHL国内委員会」の再開に向けた、日赤と関係省庁、有識者らによる意見交換会が7月11日、日本赤十字社の呼びかけにより都内で開催されました。

平成7年に開催された第26回赤十字・赤新月国際会議で各国への設置が勧告され

たIHL国内委員会。日本では平成11年度に日赤、関係省庁、有識者が参加して設置され、「ジュネーブ諸条約及び第一、第二追加議定書への加入」「有事法制と国際人道法」などを議題に協議を重ねて、平成18年度まで継続されました。

今回日赤が再度意見交換会を呼びかけたのは、「国内

参加者からは「戦争にもルールがあるというIHLが理解されておらず、ルールがないのが戦争」と考える国民が多いのではないかと、IHLの無理難題に危機感が表明されました。

今後は、定期的な情報・意見交換の場としての「国際人道法にかかる赤十字・関係省庁・有識者による連絡協議会(仮称)」を設置。「IHL国内委員会」の再開を視野に、学校でのIHL教育や赤十字標章の取り扱いなど幅広いテーマで議論を重ねていく予定です。

体験発表

輸血を受けた方、献血をされた方の体験発表の内容をご紹介します。

輸血がくれた
「毎日を元気に過ごせる幸せ」北九州市
酒井紗矢香さん

私は11歳の頃、特定疾患に指定されている難病のクローン病と診断され、治療を続けてきました。しかし、一昨年の12月27日の検診で血液濃度が正常値の半分以下にまで低下。緊急入院して輸血をするよう言われました。

12月31日、4時間かけて400mLを輸血。副作用も無く、後に手術を受けられるまでに回復しました。昨年9月には無事結婚式を迎え、現在では仕事をしながら主婦業を頑張っています。新しいいのちを授かることもできました。

毎日を元気に過ごせるのはすごく幸せです。献血を呼びかける方々や多くの献血者の皆さまのおかげと感謝しております。今では主人も「誰かの救いになれば」と定期的に献血をするようになりました。

献血の先にある
笑顔に出会いたい博多高等学校看護科看護専攻科2年生
石原美月さん

博多高校は青少年赤十字(JRC)の加盟校です。私たちは「いのちの大切さや尊さ」を伝える活動として、高校生にもできることをしたい!!と平成22年から生徒を中心に献血を実施しています。「病気で苦しんでいる人々のためのボランティア」です。

多い年では200人近い参加があり、年々高校生の参加も増えています。昨年は、血液センターの方による「献血セミナー」を行いました。献血の必要性や重要性への理解が、私たちの高校でも少しずつ広がっています。

私は看護師を目指しています。将来医療に携わる者として、多くのいのちを救えるように、そして献血の先にある笑顔に出会うため、献血を広めていきたいと思います。

献血運動推進全国大会

名誉副総裁・皇太子殿下からお言葉
「若い世代の積極的な献血参加を」

受賞者に笑顔で賞状を贈られる皇太子殿下

第49回献血運動推進全国大会が7月5日、日本赤十字社名誉副総裁の皇太子殿下ご臨席の下、福岡国際会議場(福岡市)で開催され、若い世代を中心に献血の輪をいっそう広げていくことを確認しました。

大会は7月の「愛の血液助け合い運動」月間の一環として日赤と厚生労働省、福岡県が主催したもの。全国から献血者、献血推進者など約1500人が参加しました。

式典で皇太子殿下は「血液製剤の安定的な供給には、将来の献血を支える10代、20代の理解と積極的な献血への参加が強く求められています」と強調。また式典に先立ち、

市内の高校の学校献血を視察したことに触れ、「高校生が積極的に献血をされているのを目の当たりにして、大変心強く思いました」とお言葉を述べられました。

日赤の近衛忠輝社長は、平成24年の献血者数が527万人に達し、10代の献血者数も前年を上回ったことを紹介。「その流れを確かなものにしていかなければならない」とした上で、「国民一人ひとりに、献血が他人事ではなく自分の問題だという気持ちを持つていただけたかが献血推進に欠かせない視点です」と訴えました。

大会では体験発表や功労者表彰も行われ、昭和天皇記念献血推進賞を受賞した健康保険組合連合会、凸版印刷株式会社、同記念学術賞を受賞した池田久實さんらに皇太子殿下から賞状が贈られました。

楽しく学んだ水上安全法

親子DEレスキュー in 横浜
着衣泳などを体験

「ペットボトルやお菓子の袋も浮き具になります。体の力を抜いて抱えてね!」と指導員

「レスキューボードをこぐのが面白い」「ボードから海に落ちるのが楽しかった」――神奈川県支部は7月13、14日の2日間、「親子DEレスキュー」(赤十字水上安全法講習)を横浜市の海の公園で開催。80組の親子が参加し、服を着たまま水に入る着衣泳や水に落ちた際に浮かんで救助を待つ方法などを学びました。

「口と鼻が水の上に出ていれば大丈夫! ペットボトルやお菓子の袋など身近なものを浮かべよう。最初は怖がって上手にできない子どもも、着衣泳では子どもたちから

全国のJRC指導者代表が研修会

「地域と連携した防災教育を」

各都道府県の青少年赤十字(JRC)指導者協議会の代表が一堂に会し、JRC活

動の現状と課題を探る「平成25年度青少年赤十字全国指導者協議会総会・研修会」が6月27、28日に日本赤十字社本社で開催されました。

研修会のテーマは「JRCの防災教育への取り組み」。「中学校にレスキュー部を創設し、学校が避難所になることを想定した宿泊訓練を実施」(東京都)など各校での活動事例が報告されました。また課題として「登下校中の震災に備えた訓練が不足している」「地域の被災経験の有

無などにより、教職員の防災

いく予定です。

「おねしょをしたみたい」「動きにくい!」と初めての体験に歓声が上がります。「服が重くなるよね。だから、バタバタすると危ないんだ!」という指導員の説明も、体験しながらの言葉だけに説得力があります。「慌てずに浮いていれば助かります。分かった?」という問いかけに、子どもたちからは「はい」と元気な返事が返ります。

泳などを安全に体験できるのがいいですね」と講習の魅力を語ります。

指導員のリーダーを務めた増田実枝子さんは「水の事故の80%は突然の落水で発生します。そんなとき、焦ったり怖がったりすると逆に沈んでしまいます。焦らずに対処できるように、着衣泳などを体験しておいてほしいですね」と呼びかけています。

十数年にわたり続けられている「親子DEレスキュー」。ここ数年は着衣泳への関心も高まり、参加者が増えています。小学3年生の娘の加奈さんと一緒に2年連続で参加した谷口昭二さんは「普段できない谷口昭二さんは「普段できないボードからの落水や着衣



教室の最後はレスキューボード体験。ぐんぐん進むスピードに「楽しかった」「またやりたい」の声が

常任理事会開催報告

平成25年7月19日、本社において平成25年度第4回の常任理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

記

1 予算の補正について
(福井赤十字病院の医療機器購入及び大阪赤十字病院の医療機器購入にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正)

審議の結果、予算の補正及び資金の借入については原案のとおり議決されました。

2 資金の借入について
(さいたま赤十字病院の新築工事の事業費増加、小川赤十字病院の増改

正)

また、福島赤十字病院の施設整備計画、日赤病院グループの現状と未来及び予算の補正にかかる社長専決事項等の決定状況について、それぞれ報告しました。

防災ボランティア



SKE48兼AKB48

松井珠理奈さん

ボランティアは大変かなと思っていましたが、実際に参加してみると、楽しいことがいっぱい。一人ひとりが自分のことから始めたら、きっと大きな力になるはずです。



NMB48

山本 彩さん

赤十字には、私が考えていたよりたくさんボランティアがあることが分かりました。ここに来れば、自分にもできるボランティアが必ず見つけれられるはずです。

松井珠理奈さんと山本彩さんは、地域赤十字奉仕団による災害時に備えた炊き出し訓練に参加。豚汁やおにぎりを作りながら、奉仕団の使命と活動の魅力を学びました。

1 AKB48が 赤十字ボランティアを体験！

キャンペーンのCMやポスターでは、AKB48のメンバーが実際にボランティアなどを体験する現場を紹介。そこで感じたことや発見したことを、メンバーが自身の言葉で語ります。

救急法の講習



AED(自動体外式除細動器)の使い方などを学ぶ赤十字の救急法講習。知っていれば、いざというときに人のいのちを救うことができます。また指導員資格を取得すれば、ボランティアとして指導も可能。高橋みなみさんと児玉遥さんは救急法を学ぶ大切さを訴えます。



AKB48

高橋みなみさん

少しの勇気があれば人のいのちを救えるということを講習で学びました。救急法を学ぶ講習があること、誰でも手軽に受けられることを、同世代の人たちに知ってほしいです。



HKT48兼AKB48

児玉 遥さん

AEDは使い方を知らない、いざというときに焦ってしまって、うまく使えないと思います。でも講習を受けたので、落ち着いて使えるという自信が付きました。

病院ボランティア



各地の赤十字病院で、患者さんのために活動する病院ボランティア。渡辺麻友さんと松井玲奈さんは絵本の「読み聞かせ」について事前に学び、子どもたちに笑顔を届けました。



AKB48

渡辺麻友さん

同世代の人たちに赤十字のボランティア活動への興味や関心を持っていただき、少しでも多くの人たちにこの活動に積極的に参加してもらえたら、とてもうれしいです。



SKE48

松井玲奈さん

とても楽しく、勉強になった活動でした。皆さんも実際に体験してみ、ボランティア活動はこういことかということ、楽しさを知ってもらえればいいなと思います。

JOIN!

AKB48 ×



赤十字は、あなたの力を待っている。

日本赤十字社は、今年もAKB48をオフィシャルメッセンジャーに迎え、10～30代の若い世代に向けて赤十字活動への積極的な参加を呼びかけるキャンペーンをスタートしました。

国内外における日赤のさまざまな活動は、活動資金を寄せてくださる赤十字社員*や約220万人のボランティアの方々に支えられています。しかし、社員数はこの十数年で4割以上減少、特に若い世代の関心が低くなっています。

こうした現実を踏まえ、日赤では2011年からAKB48とコラボレーションし、若い世代に赤十字のファンになってもらうためのキャンペーンを展開してきました。3年目の今年はボランティア活動がテーマ。「JOIN!」を合言葉に、あなたも赤十字のボランティア活動に参加しませんか? *赤十字社員:赤十字の人道活動に賛同し、毎年一定額以上の資金協力をいただく個人・法人

2 キャンペーン WEBサイトがスタート

AKB48のメンバーも体験した赤十字ボランティアの紹介、キャンペーンのCM動画や特典付きメールマガジン登録など豊富なコンテンツを用意しています。メールマガジン会員になると、AKB48全国ツアーコンサート会場での赤十字ブースのサポートや、AKB48のメンバーと一緒にボランティアツアーに参加できるチャンスも!「JOIN!」が盛りだくさんのWEBサイトをぜひチェックしてください。



WEBサイトはこちら
<http://www.jrc-akb48.jp/>

3 赤十字ボランティア 参加者募集!

赤十字の活動は、全国各地の多くのボランティアの方々によって支えられています。その中には、気軽に参加できるものがたくさんあります。「ボランティアの経験はなくて……」という人でも大丈夫。さあこの機会に、初めてのボランティアをみんなと一緒に体験してみませんか? 募集内容や応募方法などはキャンペーンWEBサイトで近日発表します!



赤十字ボランティアのさまざまなカタチ

災害が起きたときの
ために

普段から防災に関する研修や訓練を重ねることで災害救護活動のノウハウを習得。災害時には日赤の救護活動に協力し、被災地で活動するほか、救援物資の輸送支援や配付なども行います。

子どもたちの
ために

赤十字病院や社会福祉施設で子どもと一緒に遊んだり読み聞かせなどを行うほか、未就学児の一時保育や小学校などで出張授業を行うグループもあります。

献血推進の
ために

献血に協力していただくだけでなく、街頭などで献血を呼びかけるPR活動や移動献血車の支援、献血ルームに来所した方への案内などを行います。

専門知識や
特技を活かす

語学力を活かした通訳、視覚障害者のための点訳、災害時のアマチュア無線通信、スキーパトロールや水上安全のための活動、被災地でのリラクゼーションなどがあります。

高齢者を
支援する

高齢者福祉施設を訪問してお年寄りの話し相手になったり、レクリエーション活動や清掃、花植えなどを行ったりします。地域でもさまざまな高齢者支援の活動を行っています。

赤十字と
ともに

赤十字施設でのさまざまなボランティア、赤十字思想や人道法の普及活動、災害時の義援金や日赤活動資金の募集など、赤十字活動を支えていただくための取り組みです。

日本赤十字社 × 明治学院大学

学生の
ボランティア活動
促進へ

日本赤十字社と明治学院大学(東京・港区)は今年4月、学生など若い世代にボランティア参加を広げようという共同宣言に調印しました。今年で創立150周年を迎えた同大学は教育理念として「Do for Others」(他者への貢献)を掲げており、学

生のボランティア参加に力を入れています。日赤はボランティア情報などを積極的に提供。同大学は学生や教職員をはじめ、卒業生や他大学にもボランティア参加を呼びかけていくなど、両者の今後の協力が期待されています。



P-1グランプリ優勝！ 松山赤十字病院



愛媛県

乳がん撲滅のキャンペーン「ピンクリボン運動」。その啓発グッズとして各地で制作されたご当地ピンクリボンバッジの人気投票「P-1 グランプリ」が第21回日本乳癌学会学術総会(6月27～29日、浜松市)のイベントとして開催され、松山赤十字病院の「バリエさんピンクリボンバッジ」が優勝しました。

松山赤十字病院は2013年3月から「ピンクリボン運動」をスタート。バッジは乳腺外科部長の川口英俊医師の発案によるもので、同院内のコンビニエンスストアでのみ今年12月までの期間限定で販売中です。価格は1個500円。利益の全額が乳がん患者支援団体へ寄付されます。発売開始4カ月で売上数は7000個を突破するなど大きな注目を集めています。



学会期間中のブース販売で「バリエさんピンクリボンバッジ」は1000個を完売!

飯山赤十字病院レストラン 「食育3つの星レストラン」に



長野県

飯山赤十字病院内のレストラン「ピアン」がこのほど、長野県健康長寿課と廃棄物対策課で企画している「信州食育発信3つの星レストラン」に登録され、7月2日に登録店プレート交付式と試食会が行われました。

同院健診部は、「健康増進のための場を提供したい」「1日3回摂取する栄養面の支援ができないか」との思いから、「月替わりヘルシーランチ」をピアンでスタート。今回の「3つの星レストラン」への登録は、この取り組みが評価されたものです。試食会の出席者からは「理想的な食事の味付け、量、バランスが分かって良かった」「ハーブの風味が効果的でうす味も気になりませんでした。また利用したい」などの意見が聞かれました。



ヘルシーランチは、味・量ともに好評。患者さんの家族、地域の方々の利用も大歓迎!

コンビニAEDと 赤十字病院が救命で連携



沖縄県

那覇市内で倒れていた埼玉県の男性が、AED(自動体外式除細動器)を使った市民による救命措置と、搬送された沖縄赤十字病院の治療によって一命を取り留め、6月21日に後遺症もなく退院しました。同市は今年3月、市内のコンビニエンスストア全店にAEDを設置。これが初めて活用されました。

男性は6月4日、那覇バスターミナルで心肺停止になりました。近くの沖縄バス那覇営業所の社員らが消防への通報、胸骨圧迫、コンビニから借りたAEDでの除細動を手分けして行いました。治療に当たった新里譲循環器内科部長は迅速な対応が救命につながったと指摘。「市内のコンビニにAEDがあることを広め、質の高い救命に取り組みたい」と語っています。



救助された男性(中央)と、救命措置を行った4人のバス会社社員。右端の社員は日本赤十字救急法を2度受講

献血ルーム「カーリーノ」 10万人目は大学生



宮崎県

平成20年3月にオープンした、県内唯一の献血ルーム「カーリーノ」が6月17日、献血者10万人を達成しました。10万人目となったのは宮崎大学1年生の栗林広海さんです。

感謝状と記念品を贈られた栗林さんはこの日が6回目の献血。「この献血ルームはおしゃれで、気軽に献血できます。誰でも簡単にできる社会貢献として、これからも続けていきたい」と語りました。式典後には、一日所長を務めたモデルの佐藤あいりさんや栗林さん、宮崎市赤十字奉仕団員が街頭で献血を呼びかけました。カーリーノは6月の「ありがとう10万人献血」キャンペーンと、7月の「愛の献血助け合い運動」月間に合わせて「求む!血小板献血750人」キャンペーンも展開しました。



栗林さん(左)とモデルの佐藤あいりさん。けんけつちゃんもお祝いに駆けつけました

創立125周年赤十字大会 高円宮妃殿下ご臨席



広島県

広島県支部創立125周年記念赤十字大会が7月3日、日本赤十字社名誉副総裁の高円宮妃殿下ご臨席の下、広島市内で開催され、広島県内から赤十字社員や赤十字ボランティアなど約1300人が参加しました。

赤十字事業の功労者に贈られる有功章が高円宮妃殿下から17個人・法人に贈られたほか、日本赤十字社感謝状が大塚義治日赤副社長より8個人・法人に贈呈されました。高円宮妃殿下は「赤十字運動に参加する人々の輪がさらに広がっていくことを心より願っています」とお言葉を述べられました。また呉市赤十字奉仕団と安芸太田町立上殿小学校の青少年赤十字メンバーが防災訓練や広島原爆病院への慰問など日頃の活動について発表しました。



有功章を授与される高円宮妃殿下

おいしく食べて元気に！ 鯖江の奉仕団が炊き出し



福井県

鯖江市赤十字奉仕団(藤枝英子委員長)は7月7日、宮城県石巻市雄勝町の復興市会場や仮設住宅で福井名産の越前おろしそばと牡丹餅の炊き出しを行いました。

雄勝町は、東日本大震災で福井県支部が救護活動を展開した地域で、現在も交流が続いています。炊き出し会場では参加した63人の団員が、500食ずつ用意したそばと牡丹餅を被災者らに振る舞いました。また藤枝委員長は、被災者へのねぎらいや励ましが書かれた牧野百男鯖江市長の手紙を被災者の代表に手渡しました。炊き出しに先立ち団員は、宮城県支部職員から雄勝町の震災被害や支援活動の状況を聞くとともに、大勢の児童や教職員が亡くなった大川小学校に立ち寄り、黙とうを捧げました。



福井産コシヒカリを使った牡丹餅はお腹も心も満たします

拡大写本のボランティア 視覚障害者支援へ新奉仕団



神奈川県

書籍などの文字を弱視の人々にも読めるよう大きくしたり、太くしたりするなどの手を加えて書き写す「拡大写本」。この作業をボランティアとして行う秦野市拡大写本赤十字奉仕団が6月1日に誕生しました。

弱視の人々が日常生活に必要な情報を取得し、より良い生活を送るための大きな助けとなっている拡大写本。団員はこれまでも秦野市点訳赤十字奉仕団の拡大写本グループとして活動し、教科書や大学の試験問題の拡大作業などを手がけてきました。同奉仕団の大江昌子委員長は「勉強したいのに、教材が読めなくて勉強できないという子どもをこれ以上出たくない」と今後の活動への意気込みを語っています。



秦野市内の視覚障害者支援奉仕団は、点訳・録音・誘導の各奉仕団に続き4団目

「道徳」授業で国際人道法 人間の尊厳などを議論



大阪府

赤十字国際委員会(ICRC)が教育開発センターと協力して作成した国際人道法教育プログラム「人道法の探究」(EHL)。青少年赤十字(JRC)加盟校の阪南市立桃の木台小学校では、「道徳」の時間にEHLの授業を行っています。

5月21日の授業で6年生は「人道的な行動」について考えました。いじめを受けている人などが描かれたイラストを見て、自分が同じ境遇になった場合はどうするべきかなどを議論。「いじめられている人や困った人がいたら助けようと思います」といった意見が児童から出されました。5年生の授業では、災害時に必要最低限求められる物は何かを話し合い、「災害に備えて今日考えた必要な物をリュックに詰めて準備します」などの発表がありました。



グループワークを通して意見を出し合った児童たち

スポーツとコラボ

五輪メダリストの源さん
水上安全法救助員に合格

徳島県

徳島県出身でシドニー五輪競泳銅メダリストの源純夏さんがこのほど、県支部主催の赤十字水上安全法救助員養成講習会を受講し、見事救助員に認定されました。



「合格できて良かったです」。救助員認定証を持って笑顔を見せる源さん

6月11日から3日間、県内の屋内プールで受講した源さんは「本当に厳しい講習で何度もくじけそうになりましたが、仲間と励まし合って終わることができました。これからは救助員としての知識と技術を活かし、水の事故防止に努めていきます」と決意を語っていました。講習翌日の14日には源さんがパーソナリティーを務めるラジオ番組に支部職員が出演。源さんとともにリスナーに向けて、水を正しく理解することの大切さや、水の事故防止、赤十字講習会の受講などを呼びかけました。

心からの寄付に感謝！

京橋千疋屋が募金と売り上げを寄付

東京都

赤十字思想誕生150年キャンペーンに協力いただいた株式会社京橋千疋屋から7月2日、店内で寄せられた募金や、150年特別メニューの売り上げの一部が、日本赤十字社に寄付されました。

高級フルーツの老舗、千疋屋は150年キャンペーンに賛同。京橋本店と原宿表参道店で5月いっぱい、旬のフルーツをふんだんに使い、さらに赤十字マークもあしらった記念の特別メニュー「トロピカルパフェ」を提供しました。また現在全国巡回中の「赤十字150年写真展」のため、東京駅に近い京橋本店2階ギャラリーを1カ月にわたって無償で提供していただくなど、日赤は同社から多大な協力を受けています。



同社の小河憲治専務取締役(左から2人目)より、本社の長田信一企画広報室長に目録が手渡されました

小学生が担架搬送
赤十字災害救護訓練に参加

福岡県

福岡県支部が6月13、14日の2日間、県内の赤十字施設職員を対象に実施した災害救護訓練に、筑紫野市役所職員と地元小学生など約100人が参加しました。

訓練は、大雨による被害が発生し、指定避難所の吉木小学校へ傷病者が運ばれているとの想定で実施。児童が傷病者役や担架で搬送する役を務めました。児童は8人1組で毛布の端を丸めて担架を作り、傷病者役の友達を日赤救護員の待つ救護所へと搬送。「一度やったので、もしものことが起きても大丈夫」「みんなで協力すれば、いろんなことができると思った」など頼もしい感想が出されました。また、災害時には公的機関との連携が重要になることから、筑紫野市役所職員との救援物資搬送訓練も行われました。



吉木小学校はJRC加盟校。今回の訓練は、加盟校の健康安全プログラムの一環

殉職救護員慰霊祭
平和への誓いを新たに

宮崎県

5月19日、宮崎県支部で殉職救護員慰霊祭が行われ、第2次世界大戦で殉職した21柱の御霊に白菊を献花して慰霊するとともに、平和と赤十字活動への誓いを新たにしました。

慰霊祭には遺族や日赤看護師同協会会員ら約50人が参加。過酷な戦時救護活動の場で、赤十字の旗の下、その使命を果たすために職務を全うした人々に思いをはせました。支部敷地内にある殉職救護員像のモデル・横田京子さんのおい、横田直人さんは謝辞として、「戦争体験のないわれわれは平和への祈りを語り継ぎ、次世代に伝えていく義務を果たしていきたい」と述べました。日赤は戦火で傷ついた人々を救護するために多数の救護員を戦地に派遣し、宮崎県支部からも377人を送りました。



赤十字の理念である「人道」への思いも新たにした慰霊祭

「熱中症に気をつけて」
高校生・保護者に救急法

岐阜県

岐阜県立岐阜商業高校で6月25日、岐阜赤十字病院職員が講師を務める救急法講習会が開かれました。同校では平成15年から講習会が行われ、今回で11回目です。

約100人の生徒・保護者・教員が参加。同校校医で循環器内科部長の長島賢司医師が熱中症について講演し、「室内でも起きることがある。予防するには、適度に水分や塩分を取ることが大切」と指摘しました。その後、参加者はグループに分かれて、マネキンとAED(自動体外式除細動器)を使った救急法や、三角巾を用いた手当などを学びました。バスケットボール部マネージャーの生徒は「これからは部員に水分だけでなく塩分も取らせるようにします。救急法が必要な場面に遭ったら、率先して行いたい」。



「いざという時のために」。熱心に救急法の実技を学ぶ高校生たち

名古屋トヨペット
全社挙げて救急法受講

愛知県

災害時に人命を救えるようにしようと、自動車販売会社の名古屋トヨペットで6～7月、約300人の社員が赤十字救急法を学びました。全社を挙げての受講は県内で初めてです。

同社は毎年この時期に、避難訓練を実施していますが、いざというときに社員が救命手当をできるようにと、県支部と協力して今年から講習をスタートさせました。各店舗に設置されているAEDを社員が使えるようにすることも目的です。6月26日、名古屋市熱田区の同社本社で行われた初日の講習。消防署で救急法を学んだ経験があるという瀬口佳代さんは「全部の手順は覚えていませんが、胸骨圧迫をするときに手が自然に胸に行きました。一度経験しておくとはやはり違いますね」と語りました。



指導員の説明を聞きながら、熱心に心肺蘇生を学ぶ社員の皆さん

INFORMATION

FOX BEACH HOUSE オープン!
赤十字オリジナルドリンク販売中

鎌倉・由比ヶ浜の「FOX BEACH HOUSE」(9月8日まで営業)で、この夏、赤十字オリジナルドリンク「Red Cross スムージー」を販売しています。8月3日には、赤十字水上安全法を親子で体験できるイベント「ビーチで課外授業～Nat Geo Experience」も開催。この夏はぜひ、「FOX BEACH HOUSE」へ!

Def Techニューアルバム『24/7』好評発売中!

日本赤十字社 TVCM ソング「Borelo」「Be The One」ほか全11曲収録。

- ・CD+DVD付 初回限定盤 2470円(税込)
- ・CD通常盤 1980円(税込)



プレゼント

携帯FMラジオ&ライト(幅10.5×高さ3.5×奥行き1.7cm)を3名様にプレゼントします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールにてご応募ください。

- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS 8月号を手にした場所(例/献血ルーム)
- ⑥赤十字NEWSへのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

応募先 ● 郵送 / 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室 赤十字NEWS 8月号プレゼント係
FAX / 03-3432-5507
メール / koho@jrc.or.jp (件名「赤十字NEWS 8月号プレゼント係」)

応募締切 ● 8月26日(月) 必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

WORLD NEWS

インド北部洪水災害

インド赤十字社、IFRCが救援活動
日赤の先遣隊も被災地調査

一帯はまるで巨大なシャベルで削り取られたように抉られ、道が無くなってしまったところも——6月中旬の大雨による洪水で死者1000人以上、行方不明者5700人以上という被害を出したインド北部。日赤は、6月下旬に医師、事務職員の2人をインドへ派遣。インド赤十字社(インド赤)、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)とともに被害の大きかったウッタラカンド州に入った和歌山医療センターの天津聡子医師は、「こころのケアなど長期的な活動が求められている」と言います。

1300村が孤立状態

被災地は、背後にヒマラヤ山脈を抱く急峻な山岳地帯のため、道路の寸断により1300もの村が孤立状態に陥っています。インド赤はIFRCと連携し、救援物資の配付や医療支援などをシェルパ(登山ガイド)、ボランティアの協力を得て実施。自宅を流された被災者のために1000張以上のテントを設営したほか、断水した村へ給水タンクを設置し、8000人分の飲料水を確保しました。また、家族と離ればなれになった

人々の安否調査や通信サービスにも取り組んでいます。

こころのケアも課題に

しかし課題も少なくありません。一つは生活復興への道のりです。被災地はヒマラヤ登山の観光地。住民の中にはシェルパなど観光業を副業として生計を立てている人も多く、登山客がいつ戻ってくるのかめどが立たないからです。

もう一つの課題は、被災者の精神的なサポートです。インド赤も「こころのケア」の



被災者から話を聞く天津医師(右)



被災地では被害の全容がまだつかめておらず、死者・行方不明者数は今後拡大する恐れが

重要性は認識しているものの、過去に取り組んだ経験が少なく、十分な手だてが講じられていません。

天津医師は「阪神・淡路大震災と東日本大震災を経験した日赤にはこころのケアの蓄積があります。この経験を共有すること

で、インド赤の取り組みをサポートできるのでは」と語ります。

現在、日赤はインド北部洪水の被災者支援の救援金を受付中。寄せられた救援金はこころのケアをはじめとする中長期的な支援に活用していく予定です。

救援金へのご協力をお願いします

名 称／2013年インド洪水災害
受付期間／平成25年9月24日(火)まで
受付口座／郵便振替口座00110-2-5606
口座名義／日本赤十字社

※通信欄に「2013年インド洪水災害」と必ずご記入ください。

※受領書をご希望の場合、その旨を通信欄にご記入ください。
※窓口での振り込みは手数料が免除されます。
※インターネット、銀行口座からの救援金も受け付けています。
詳しくはホームページ(<http://www.jrc.or.jp>)をご覧ください。

ケニア

IFRCとJICAが洪水被害の支援で連携
支援の医薬品が支えた巡回診療

今年3月から5月まで大雨に見舞われたケニアでは、広範囲に及ぶ洪水により90人以上が死亡し、14万人が避難生活を送っています。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は、日本が国際協力機構(JICA)を通じて行う物資支援を、JICAとの協力協定に基づいてサポートしました。

JICAは、開発途上国に対する日本の政府開発援助を一元的に実施する機関。昨年12月、IFRCはJICAとの間で業務協力促進の覚書を締結し、人道支援と開発プログラムを一体となって推進することなどを確認しました。

今回、IFRCはケニア被災地への救援物資の配付や保健サービスの提供などを盛り込んだ支援計画を4月に発表し、各国赤十

字社の協力を得て実施しています。一方JICAは、日本政府から寄せられた1600万円相当の緊急支援物資をIFRCとの協定に基づき、ケニア赤十字社(ケニア赤)に託し、被災地へ届けました。

JICAとケニア赤の調整にあたったケニア駐在員の五十嵐真希さんは「互いにプロセスや手法など不慣れな点もありましたが、浄水剤や医薬品、医療用キットなどの支援



巡回診療を行なうケニア赤十字社のスタッフ。村人からは「本当にありがとう」の声

物資の調達、被災地への配送がタイムリーに行えてホッとしています」と話します。

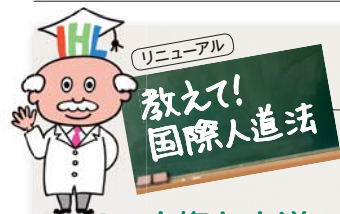
感染症防いだ
赤十字の保健衛生活動

洪水被災地ではケニア赤とケニア政府保健省が、JICAから支援された医薬品・医療用キットを活用し巡回診療を実施。1日200人を超える村人が受診に訪れました。

人々からは「洪水で家を失った上に、医療施設への道も寸断された。巡回診療で多くの人が助かりました」と感謝の声が寄せられました。

ケニア政府保健省の職員は「一番の課題は医薬品不足でした。今回の支援には本当に助けられました」と安堵の表情。ケニア赤のスタッフは「これまでの赤十字による保健衛生活動や支援された浄水剤の配付により、洪水後のコレラや下痢などの感染症を防ぐことができました」と活動の成果に胸を張ります。

今回の緊急支援は、生活再建への第一歩となりましたが、現在も被災者は厳しい生活を余儀なくされています。日赤はケニア北東部での地域保健強化事業に6年前から取り組んでいます。今後も同国内の保健衛生活動の支援を継続していく予定です。



IHL(International Humanitarian Law=国際人道法)博士が国際人道法の疑問に答えます。

今月の疑問 人権と人道はどう違う?

Q 人権と人道。
似てるけど何が違うの?

A 「思想・良心の自由」「表現の自由」など、誰もが生まれながらにして持っているのが人権。現代では「人権教育」とか「ネット社会での人権」など、あるべき社会の姿を考えると、人権は欠かせない視点となっているね。一方の人道は、人々の「苦痛」を出発点にした考え方。紛争や災害時に人間のいのちと尊厳を守り、人々の苦痛を予防・軽減することが「人道の原則」であり、赤十字の使命でもあるんじゃないよ。

Q どうやって
人々の苦痛を軽減するの?

A 赤十字などによる人道支援活動を保護し、負傷者・難民などの救護や生活を支援するんじゃない。紛争時に適用される国際人道法では、市民への攻撃禁止と負傷者の看護、医療要員と赤十字標章の尊重が義務づけられているほか、不必要な苦痛をもたらす武器使用の禁止も定められているんじゃないよ。紛争時には世界人権宣言などの国際人権法も適用される。人道と人権は人間のいのちと尊厳を守る車の両輪なんじゃ。

新連載

赤十字150年

今月の一枚—写真で振り返る赤十字—

1945年第2次世界大戦末期、東京の「捕虜情報局」を訪ねる赤十字国際委員会(ICRC)駐日首席代表マルセル・ジュノー博士



ジュノー博士(写真右)は、連合国の捕虜、被拘束者の処遇状況を確認したほか、被爆者支援のため、医薬品類15トンを持って広島を訪問。ICRCは中立機関として犠牲者の保護と救済に当たりました